

この章のまとめ

この章では、冠詞についての基本的な考え方を応用し、いろんな場面でその冠詞が使われる理由について考察しました。

- ❑ the next Sunday は「今」以外を基準にした「その次の日曜」、next Sunday は「今」を基準にした「今度の日曜」。
- ❑ as a result 「その結果として」は、「何かの結果の1つとして」の雰囲気です。a result となる。
- ❑ ふだんは無冠詞で使う breakfast も、形容詞が付くと、a big breakfast のように a を付ける。
- ❑ beginning は、end と対置されると the が付く。
the beginning ↔ the end。
- ❑ hair は、ふだんは不可算名詞でも、「髪の毛1本1本」について言うときは、a hair となる。
- ❑ possible の意味する可能性は確信度がかなり低いものだが、a possibility は「ひょっとするとあるかもしれない可能性」で肯定的な雰囲気。
- ❑ knowledge と education は a/an を付けて使うことがあるが、可算名詞として使うのではなく、複数形になることはない。
- ❑ in a hurry は、「始めと終わりのある感じ」で、a を付ける。in haste は「素早くやっている状態」なので、a は付けません。

第8章 冠詞を決めるもの(その2): コンテキスト

この章では、冠詞を決める要素として、「コンテキスト(文脈)」について取り上げてみましょう。

ここでは、コンテキストという言葉をもつ2つの意味で考えてみましょう。1つは「文章の流れ」、もう1つは「単語のつながり」です。

(1) コンテキスト(文脈)とは?

「コンテキスト」とは何でしょうか?

ふつうは、文章の流れのことをコンテキスト(文脈)と呼びます。予備校でも、長文読解の授業で、「文脈から考えると3が答えです」なんていう説明をします。

でも、「文脈」というのは危険な言葉です。「文脈」が何であるかをきちんと考えないまま使うとあいまいになるからです。授業の解説で「文脈から明らか」と言われると、わかったような、わからないような、煙にまかれたような気になります。生徒は、その「文脈(コンテキスト)」がわからないから授業を聞きにきているのですから...

日本語について考えてみましょう。

日本語では、コンテキストは空気みたいなものです。言葉ではっきりと表されない部分に多くがゆだねられます。

例を見てみましょう。

「昨日車を見に行ったら。気に入ったのがあった。買った」

場面を想像すれば、言いたいことは明らかですが、はっきりと言